

# 「輝かしい未来と仕事」～私たちが未来を変える～

2019年、ILO（国際労働機関）は創設100周年という大きな節目を迎え、6月の第108回総会で「仕事の未来に向けた創設100周年記念宣言」を採択した。連合も、今秋に結成30周年を迎えるにあたって、連合ビジョン「働くことを軸とする安心社会—まもる・つなぐ・創り出す—」をまとめた。共通するメッセージは「未来は変えられる」だ。世界は今、情報技術革新、人口動態、気候変動、グローバル化などによって、かつてない規模と深度の急激な変化に直面している。その課題をどう受け止め、「仕事の未来」を切り拓いていくのか。G20（金融・世界経済に関する首脳会合）閉会直後の大阪で、ILO初の労働組合出身事務局長であるガイ・ライダー氏と神津会長が語り合った。（進行／元林稔博連合総合国際局長）

## 国際的な緊張の高まりの中で

**神津** 今年は、G20大阪サミットに続いて、8月にL20（※）が東京で開催されます。それに先立ってこうした機会をいただきありがとうございます。

**ライダー** 神津会長とゆくりお話しするのは、昨年のアルゼンチン（G20議長国）での労働雇用大臣会合以来ですね。私も、大切な友人に大阪の地で再会できて本当にうれしく思います。

**元林** では、まずG20大阪サミットを終えての感想をお伺いしたいと思います。

**ライダー** 大阪サミットについては、後ほどILOとして公式声明を出しますが、まさにたった今閉幕したという中で、私の印象をお話ししましょう。

G20は、2008年、リーマンショック後の世界金融危機への対応を話し合うために始まったものですが、この10年余を振り返っても、最も難しいサミットであつ

国際労働機関（ILO）事務局長

ガイ・ライダー  
Guy Ryder

特別対談

Rikio Kozu

神津里季生

連合会長

たと思います。背景にあったのは、国際的な緊張の高まりです。すでにそのことは認識されていましたが、今回のサミットを通じて、その深刻さを痛感させられました。

焦点は言うまでもなく米中の貿易摩擦と気候変動対策への対応ですが、グローバル経済下における人の移動や過剰生産能力への対応も重要な課題になっていると感じました。雇用労働分野に関しては、①高齢化社会への対応、②女性の労働市場への参加・参画、③雇用によらない労働（プラットフォーム労働など）への対応などが課題となりました。労働組合にとっても馴染み深いテーマです。例年は、サミットの前に労働雇用大臣会合を開いて、その議論内容を反映させてきましたが、今年はサミット後の9月に愛媛県松山市で開催されます。そこでより深い議論をしたいと考えています。

本日、「首脳宣言」を採択することができましたが、気候変動対策に関しては「パリ協定」離脱を表明しているアメリカが異なる立場

を崩さず、「19+1」という形になりました。とりまとめにあたって議長国日本には、相当のご苦労があったことと思います。その努力に敬意を表します。

## 人間中心のアジェンダ

**元林** ILOは、創設100周年を迎えるにあたって、「輝かしい未来と仕事」（「仕事の未来世界委員会」報告）をとりまとめました。これはソマリア前事務局長が提案した「デービス・ワーク」（1999年）に引き続いての歴史的な文書として高く評価されています。その実践に向けては？

**ライダー** ILOは、「輝かしい未来と仕事」の報告に続いて、6月の第108回総会では「仕事の



『輝かしい未来と仕事』

※L20 「The Labour 20」の略。G20にあわせて開催され、G20サミットに参加する国や地域からナショナルセンターなどの代表が集まる会合。



ガイ・ライダー | Guy Ryder |  
国際労働機関 (ILO) 事務局長

1956年、英国リバプール市生まれ。ケンブリッジ大学、リバプール大学で学ぶ。イギリス労働組合会議(TUC)国際局、国際自由労連(ICFTU)ジュネーブ事務所長などを経て、1998年ILO入局。その後、ICFTU本部書記長、国際労働組合総連合(ITUC)書記長を歴任後、2010年ILO本部に復帰し、2012年第10代ILO事務局長に就任。2016年再任。



進行 元林稔博  
連合総合国際局長

未来に向けた創設100周年記念宣言」を採択して、困難な課題に立ち向かう一歩を踏み出しました。それは、まさに「仕事の未来」への羅針盤であり、行程表(ロードマップ)であるとお考えください。

最大のポイントは、「人間中心のアジェンダ」であることです。人に対する投資、人が持つ能力に対する投資こそが重要であり、加えて社会の変化に対応した様々な制度の変革を提言しています。また、未来の仕事がどこから生み出されるのかということにも、様々な形でアプローチしていくとしています。重要なのは、このアジェンダのオーナーシップは、各加盟国の政府・労働組合・使用者にあるとい

うことです。ILO本部でも、これをベースに独自のプログラムを策定して実践していきますが、各国の政労使が、自らの課題として主体的に取り組んでこそ、「仕事の未来」を輝かせることができる。そのことを改めて申し上げておきたいと思います。

### まもる・つなぐ・創り出す

元林 連合も、結成30周年を迎えるにあたって、「働くことを軸とする安心社会」を深化させた、新しい連合ビジョンを策定しました。そのポイントは？

神津 連合は、これまでも、時代の変化や直面する課題に対応して

面もあります。社会において人と人をつなぐ接着剤にもなっています。連合ビジョンもまた、「働くこと」に最も重要な価値をおいている。それは、まさにILOの「仕事」の捉え方と同じです。

3つめは、「仕事の未来」に対応して、自らも変革していくという視点を持つということです。今、ググエコノミーなど、従来の雇用労働とは異なる働き方が登場しています。そうした不安定な労働者の権利を守るには何が必要か。労働市場や労働法制の整備だけでなく、労働組合自身が、多様な働き方の人々を包摂する組織へと自らを変革する必要があります。これは非常に重要です。それができ

るかどうかが、「仕事の未来」を方向づけることになるからです。すべての働く人を代表する組織として、労働組合は時代の変化にどう適応していけばいいのか。連合は、これまでも自ら変わるといふ努力を積み重ねてきましたが、これからもその取り組みを続けていかなければならないと期待しています。ILOも、同様の視点から自らの組織変革を進めていきたいと思っています。

神津 連合ビジョンにお目通しいただき、その最も重要な考え方を完璧に読み込んでいただいて感激しました。本当に感謝申し上げます。

おっしゃる通り、連合ビジョンの「未来は変えられる」というコンセプトは、ILOの提言と共通するところ。また、私たちが「改めて『働くこと』の基本的な意味を再確認する」ところから議論をスタートさせました。生活の糧を得るための労働だとしても、ディーセント・ワークであるならば、それ自体が自己実現の機会となり、社会の発展に貢献できる。働くことを通じて築かれる関係は、すべての人が支え合い共生できる社会

いこうと、節目ごとに労働運動がめざすべき社会のあり方を提起してきました。結成30周年を迎えるにあたって問題意識としてあったのは、これまでの社会の基盤を揺るがすような変化をどう受け止めるかです。少子高齢化・長寿化が進んで、今後労働力人口の大幅な減少が避けられない状況にあります。それに対応した雇用システムや持続可能な財政・社会保障制度をどう構築するのか。またAIなどの情報技術革新の進展はめざましく、その可能性に期待が寄せられる一方、人間の仕事が失われることへの不安も広がっています。地球規模では、気候変動の影響が身近に感じられるものになり、すべてのセクターに対策が求められています。こうした課題に対して労働組合は何かができるのか。時間をかけて、組織全体で議論を行い、「働くこと」に軸を置き、働く仲間一人ひとりの尊厳とくらしを「まもる」、働く仲間・地域社会を「つなぐ」、社会・経済の新たな活力を「創り出す」というビジョンを提起しました。

共通点は、大きく3つあります。1つは、「私たちが未来を変えたい」というスタンスです。未来はすでに決定されているものではない。未来は私たちの手にある。私たち自身が変えていくことができます。なかでも、労働組合は「仕事の未来」を創り出していく役割を担っている。これはまさにILOのスタンスと同じです。

連帯の基礎となる。そのためには、年齢や性、国籍の違い、様々な障がいの有無にかかわらず、誰もが働くことができる仕組みが必要だと考えました。そして、いかに労働組合としてそのことを体現していくのかを強く意識しながら、「まもる・つなぐ・創り出す」という自らの役割を提起したのです。

### 「社会契約」の再活性化

元林 ILOの報告書「輝かしい未来と仕事」は、政労使による「社会契約」の再活性化を提案し、集団的利益代表制・団体交渉の重要性にも言及されています。労働組合にとって大変心強い指摘ですが、その意味するところとは？

ライダー 「社会契約」に関して、ILOの歴史を振り返りながらコメントさせていただきます。これは私

の見解であると同時に「仕事の未来世界委員会」の見解でもあります。ILOは100年前の1919年に創設されましたが、そのこと自体が、当時最大の国際的な社会契約であり、歴史に刻まれるべき出来事でした。世界が第1次世

界大戦で荒廃する中、日本を含む43の国が「世界の永続する平和は、社会正義を基礎としてのみ確立することができる」というILO憲章を採択し、平等で公正な仕事の世界を創り出すために、労働者と使用者、政府の代表という三者構成による機関としてスタートを切ったのです。以来、100年にわたって、ILOは、三者構成主義を守りながら社会正義と平和の実現に取り組んできました。

ただ、近年においては、この「社会契約」の関係に歪みが生じているとの懸念も示されるようになってきました。グローバル化や情報技術革新によって経済は成長しているけれども、働く人々はその成果を公正に分配されていない現状がある。世界で広がる貧困や格差は、その結果ではないかと。

1944年の「フィラデルフィア宣言」にもあるように、一部の貧困は全体の繁栄にとって危険であり、公正な分配のためには政労使が同等の立場で協力する社会契約が必要です。そして、その再活性化のカギを握るのは、「強い労働組合」の存在です。労働組合がその



神津里季生  
連合会長

## ■ILO（国際労働機関）のあゆみ

1919年 ILO誕生 「ILO憲章」採択（日本は創設時のメンバー）

### ●ILO憲章 前文より一部抜粋

- 世界の永続する平和は、社会正義を基礎としてのみ確立することができる。
- そして、世界の平和及び協調が危くされるほど大きな社会不安を起すような不正、困苦及び窮乏を多数の人民にもたらす労働条件が存在し、且つ、これらの労働条件を改善することが急務である。
- また、いずれかの国が人道的な労働条件を採用しないことは、自国における労働条件の改善を希望する他の国の障害となる。

1920年 事務局をジュネーブに設置

1944年 ILOの目的を再確認し、戦後の体制を整えた「フィラデルフィア宣言」を採択

### ●フィラデルフィア宣言（ILOの目的に関する宣言）抜粋

- (a) 労働は、商品ではない。
- (b) 表現及び結社の自由は、不断の進歩のために欠くことができない。
- (c) 一部の貧困は、全体の繁栄にとって危険である。
- (d) 欠乏に対する戦は、各国内における不屈の勇気をもって、且つ、労働者及び使用者の代表者が、政府の代表者と同等の地位において、一般の福祉を増進するために自由な討議及び民主的な決定とともに参加する継続的且つ協調的な国際的努力によって、遂行することを要する。

1969年 創設50周年 ノーベル平和賞受賞

1998年 「労働における基本的原則及び権利に関するILO宣言」採択

2008年 「公正なグローバル化のための社会正義に関するILO宣言」採択

2019年 創設100周年 「仕事の未来に向けた創設100周年記念宣言」採択  
現在の加盟国は187カ国

く人にとっても、企業にとっても、メリットが感じられるものでなければなりません。そのためには、子育て支援などの政策への大規模な投資や労働時間の見直しが不可欠です。神津会長は、「働き方改革」の議論に参画され、大きな役割を果たされましたが、まさにそれは女性や高齢者の労働市場への参画を進める上で重要な政策です。その具体的取り組みにおいては、人間を中心に据えたアプローチをさらに進めてほしいと思います。

**神津** 日本は、世界でも類を見ないスピードで少子高齢化が進み、人口減少社会を迎えています。この難題をどう乗り越えるのか、世界が注目しています。楽観はできませんが、その解決策を見だし、「未来は変えられる」ことを示していきたいと思っています。

**ハラスメント条約の早期批准を**

**元林** 最後に連合に対する期待や

役割を自覚し、良好な団体交渉の枠組みと仕組みを構築し、社会対話を促進すること。それが今、改めて求められています。社会契約は、働く人だけでなく、すべての人々が共通して享受すべき利益のためにも、社会の緊張を緩和し統合していくためにも、また世界の平和と安定、民主主義の推進のためにも非常に重要な仕組みです。今回のG20においても「社会契約の再活性化」というアイデアは、より現実味を帯びて、多くの人の心に強く刻まれたのではないかと感じています。

その文脈で言えば、日本においては、強いナショナルセンター連合があることが、まさに働く人たちにとっても、社会にとっても、非常に大事であるということ。神津 100年も前に、世界の主要国が政労使三者構成の重要性を共有してILOを設立したことは、大変画期的であり素晴らしいことです。

今、世界では、対立と分断が懸念される状況がありますが、長い人類の歴史で考えれば、行きつ戻りつしながらも確実に進歩してい

る。その一つの根拠は、ILOが100年の歴史を刻み、さらに未来を見通して力強い提言を発していることにほかなりません。まさにILOは人類にとっての宝であり、その理念と実践を引き継いでいかなければなりません。

そして、一つ間違いなく言えることは、労働組合がなければ、三者構成も労使関係も成り立たないということ。労働組合をきちんと根づかせ、広げる。それは、連合をはじめ労働組合の役割であり責任です。労働組合があった、健全な労使関係、三者構成主義が築かれていれば、どんな難問も、徹底的に話し合っ、対応すべき方向性を見いだしていくことができる。付加価値の公正な分配を実現して、経済の成長や世界平和の基礎を強固なものとし、持続的な発展を生み出していける。ナショナルセンターとして、労働組合の良さと存在意義を、もつと社会に発信していきたいと思っています。

**高齡化と労働市場の変革**

**元林** 「仕事の未来世界委員会」に

は、日本から清家篤慶義塾大学前塾長が参加し、積極的な提言をされました。とりわけ日本において、重点をおくべき分野と課題についてはいかがでしょうか。

**ライダー** 清家先生は、「仕事の未来世界委員会」において、日本の状況も踏まえつつ、重要な論点を提起され、おおいに貢献してくださいました。

第1は、人口動態。特に高齢化が仕事の世界にどう影響するのかが重要な論点です。労働力人口が減少する中で、高齢者や女性が積極的に労働市場に参加できるサポートがまず必要です。人々が長く労働市場にとどまれるよう労働市場そのものの変革も求められます。さらに社会が急速に変化する中で長期にわたって働き続けるためには、労働者個々人のスキルを継続的にアップグレードしていくことが不可欠です。産業や生産システムの「移行」に対応できるように、生涯学習の普遍的権利を保障し、効果的な生涯学習システムを確立していく、人への投資が重要な課題だと言えるでしょう。

また、高齢者の労働市場への参



今年6月の第108回ILO総会でスピーチするガイ・ライダー事務局長

提言を。

**ライダー** 連合のみなさんは、すでに自ら何をなすべきかをよくご存じです。ILOは100周年という節目を、過去を振り返るだけではなく、未来に目を向け、考えるチャンスだと捉えました。これは、結成30周年を迎える連合も同じだと思います。

ご承知の通り、6月のILO総会において「仕事の世界における暴力とハラスメント」に関する条約・勧告が採択されました。今後は、それぞれの加盟国での早期批准が課題です。連合も日本政府に対し、批准を働きかけていただければと思います。

最後に個人的なコメントを申し上げます。連合のみなさまとは、本当に長い間、友好的で連帯と寛容の精神に満ちあふれた関係を築かせていただいています。神津会長、歴代会長をはじめ連合のみなさんは、一貫して国際連帯を重視し、大切にすべき価値を共有してくれています。改めて感謝申し上げます。

8月から9月にかけて、東京でのL20、横浜でのTICAD7

(第7回アフリカ開発会議)、松山でのG20労働雇用大臣会合に参加するために再来日します。またお会いできることを楽しみにしています。

**神津** 温かいお言葉ありがとうございます。私からも感謝を込めて一言申し上げます。

まず、「仕事の世界における暴力とハラスメント」に関する条約が採択されたことは画期的であり、連合も日本の条約批准に向けて最大限の努力をしていきたいと思えます。また、ILOの中核的労働基準のうち未批准の2項目の批准と公務員の労働基本権の回復も、早期に実現させたいと考えています。

ILOの「人間中心のアジェンダ」の策定には、ガイ・ライダー事務局長をはじめ、労働組合出身の人たちが大きく寄与されています。その活躍を誇りとして、私たちも未来に向けた運動を進めて参ります。

次回、東京でお会いできることを楽しみにしています。

**元林** 本日はありがとうございました。